探求・川にちなんだ万葉集の歌

第54回

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭　澤井　園子

二月十四日に、下野国の防人部領使正六位上田口朝臣大戸の進れる歌

（巻第二十　四三八一番歌）

国々の防人つどひ船乗りて
別るを見ればいともすべ無し

右の一首　河内郡上丁神麻続部島麿

夕方の買い物帰りに、近所の花屋に立ち寄る。慌ただしいなかでも、鮮度がまだまだ良さそうで、手頃な値段の花束を二、三選んで手に取る。最近、玄関に花を生けるようになった。もちろん我流で。西の玄関だから、黄色の花だと金運が上がるかも・・・と聞きかじった風水のことなどを思い出して「庶民」の自分を思う。が、何より、家を出るとき帰ってきたとき、花が迎えてくれるのはうれしいものだ。「これください。」と言うと、「毎度ありがとうございます。」と返ってきて、少し驚いた。「毎度」という言葉がつくだけで、急に馴染みの店になった気がする。お愛想で言っている人の言葉は耳も素通りしていくが、そのときはなぜか一歩近づいたような認められたような気がした。

万葉集には、東国農庶民の歌があり、防人の歌がある。この歌は、「各国の防人が集まってきて船に乗り、まさに今別れゆこうとしている。それを見ると、悲しみがあふれて、なす術もない。」と歌っている。日本軍が朝鮮の白村江で負けた後に、「み崎守り」として九州・壱岐・対馬に兵を置いた。初めは九州の人を当てていたが、後に主として東国の民を置くようになった。任期は三年で、毎年三分の一が交代させられたという。政府が命令すると、それぞれの国の防人部領使というのが兵を連れてきて、難波に渡す。大伴家持は、その中央の役人をしていて、そのときに、防人の歌が家持に伝わったと思われる。そうして八十を超える歌が選ばれていった。「醜の御楯と、出立するぞ」と国を守ろうという歌が十首ほどある。残りの他は皆、残してきた愛しい妻・育ててくれた父母への愛や、故郷を懐かしむ思いであふれている。

下野の国河内郡の美しい鬼怒川の流れ。阿久津大橋から南に延びる堤防の終わるところに川の一里塚があり、すぐ側にこの歌碑も建っている。仕事とはいえ、九州に兵を送る役割をもち、それを見送る人。万葉の昔、栃木から九州へと赴任することそれ自体が命をかけた大変な旅だろう。「守る」ということは並大抵ではない。公と私。どちらもある。あってこそ人なのだろう。素直な思いは何よりも代え難い。庶民の思いを地方色豊かに載せた巻がある万葉集にもまた、高貴な輝きを感じて止まないのである。

店員さんはさりげなく、ケースからフリージアを一本出して、おまけしてくれた。けれど、サービスしたことは言わず、笑顔で「お待たせしました。」と渡してくれた。「おまけしといたで。」という元気なおばちゃんも好きだし、奥ゆかしい人もいい。そこに真心があって、その人らしければ、温かさを感じられる。そんな商いがずっと続いてほしいと思う。クリック一つで物が届くこの時代だからこそ。

参考文献「万葉の人びと」　犬養　孝